

望みのない世界の外にも世界がある

西 村 二 朗

奨励者紹介〔にしむら・じろう〕

日本キリスト教団鴨東教会牧師

鴨東キリスト教学園鴨東幼稚園園長

次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたま、口汚くののしって、パウロの話することに反対した。そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。主はわたしたちにこう命じておられるからです。

『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、

あなたが、地の果てにまでも

救いをもたらすために。』」

異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追いつ出した。それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

（使徒言行録 13章44—52節）

名前のない生きづらさ

鴨東教会には小さな幼稚園があるのですが、動物園に遠足に行ったときに、サル山を見ていた園児の一人がつぶやいたのです。

「サルはいいなあ、サルになりたいなあ」と、幼稚園児にして、すでに生活に疲れている、という事実に変ショックを受けました。

人が生きている意味とか、価値というものが見失われてしまっている時代、そういった社会を、私たちが作り上げてしまったのではないかということなのです。子どもたちにとって生きていくということは、無限の可能性を探索していく喜びではなくて、やがて迎える絶望へと向かっていく労苦としてしか思い描くことができずにいる、ということです。

日本キリスト教団の京都教区には、「不登校・ひきこもりの青少年や家族と共に歩む特設委員会」というのがありますが、昨年9月に山下耕平さんを迎えて講演会を開きました。山下さんは、不登校新聞の創刊から8年間編集長を務めた方で、今は大阪でフリースクール・フォロを運営し、関西学院大学でも講師を務めておられる方です。

講演のテーマは「名前のない生きづらさ」というのですが、同じ名前の本も書いておられます。それは子どもや若者の状況を見て、不登校、ひきこもり、ニート、発達障がいといった、いろいろな名前では呼べども、その当事者である子どもや若者の実感とはズレていると彼は言うのです。何かははっきりとした理由があるのではない、なんだか、もやとした生きづらさといった感覚があるように感じるというのです。

子どもや若者が身動きできなくなってしまう、そのきっかけとしては、いじめがあったり、発達障がいがあったり、親との口藤や挫折体験があったりして、いろいろ原因を探することができるかもしれないけれども、それは問題の本質ではなくて、今の若者たちを取り巻いている「生きづらさ」とは何なのか、を私たちは真剣に考えていかなければいけないということです。

先日3日ほど休みがいただけたので、一泊二日の強行軍で帰省してきましたのですが、帰りの新幹線に幼稚園の年少くらいの女の子が、お母さんと一緒に乗ってきました。席に着いてすぐは、その子は張り切ってお母さんの荷物を片づけたり、ご機嫌でいたのですが、新幹線が動き出すと「お父さんといっしょにいたい」と泣き出してしまいました。

どうもお父さんは単身赴任中で、女の子はお母さんと休みに会いに来ていて、帰るところだったみたいなのです。どうしようもないことですから、お母さんも何も言えませんよね。女の子はメソメソ泣きながら、小さな声で、「おとうさんがいい」「おとうさんがいい」と繰り返しています。

こういうことを子どもは言います。別にお母さんが嫌で、お父さんの方が良いと比べているのではないのです。ただお父さんといたいという望みで、頭がいっぱいになっていて、こういう表現になるわけです。でも最近の親御さんにはそれが分からない人がいて、「じゃ、お父さんと住みなさい」なんて怒り出す人がいますから、内心、はらはらしながら聞いていたのです。でもこのお母さんは素晴らしかったです。ずっと黙って女の子の体をぼんぼんして、寄り添ってあげていました。

すると、「おとうさんがいい」「おとうさんがいい」「おかあさんがいい」という風に、3回に1回くらい、お母さんが交ざるようになったのです。

この女の子の気持ちの変化が、すごく宗教的な発見なのです。悟りです。辛いこと、嫌なこと、悲しいこと、そういった思いで頭がいっぱいになってしまったとき、人は、今ある大切なものに気付けないのです。自分は不幸のどん底にあって、もう何一つ良いことなどないと思ってしまうのです。けれどもそうした思いから少し手を離してみると、やさしい大好きなお母さんが泣いている私の傍らにいてくれる。お母さんも聞いていて辛いような言葉を、黙って受け止めてくれている。その気付きが悟りなのです。悲しい状況は何も変わらないのです。お父さんとはしばらく会えないのです。でも、そんな悲しみの中に、もう一度、「お母さん」という光を見出すことが、この子はできたわけです。

これが宗教の役割です。私が絶対だと思い込んでいる世界の外側にも世界があるということに気付くことです。世の中とはこんなものだ、他の人も言うし、すべての人が信じているように思える。けれども、そう思っていない人も必ずいるのです。違っている価値観も、文化もこの世界には必ずあるのです。確かに肉体や命の限界はあるけれども、その命の先に尚、命を見出すことのできる魂の存在を信じることができる。そうやって自分自身が閉じ込められていた世界から解放されること、それが悟りであり、回向であり、キリスト教のいう新しい命、新生ということです。

今日の聖書の出来事に先立って、パウロはアンティオキアで説教をいたします。その内容は、イエスさま

は真実の王であるダビデの血統を引く者であり、神さまの救いの約束の成就として来られた。けれども聖書を読み、良く知っていたはずの人たちが、イエスさまを救い主メシアと認めることができなかった。しかし、だからこそイエスさまは復活されたのだ。人が理解できずに拒絶し、イエスさまを殺してしまった。けれどもイエスさまを殺したことに對する神さまの応えは、復活なのだ。だからイエスさまの十字架には、赦しと解放が約束されている。もしこの復活されたイエスさまを再び拒絶してしまったら、折角の神さまからの良い知らせ、福音はあなたたちのものではなくなってしまう。他の人たちのものになってしまうだろうと訴えたのです。

神をあがめる人たち

このパウロの説教は大勢の人の心に響いたようでした。今日の聖書は、その一週間後の出来事です。町中の人たちがパウロを通して福音の言葉をもう一度聞こうとして集まってきたわけです。ところが、ユダヤ人たちの中にこれを妬んで妨害した人たちがいたと書いてあります。それを知ってパウロとバルナバは、一週間前に語ったように宣言するのです。「わたしたちは異邦人の方に行く」。異邦人たちはこれを聞いて喜びます。そして多くの人が信仰に入ったと書かれています。一方で、ユダヤ人たちは、パウロたちを憎み、彼らをその地方から追い出してしまった、と記されています。

さて、ここには本来、神さまの民であり、救われるはずだったユダヤ人たちがその救いから離れていってしまう様子が描かれています。その一方で、本来、救いから遠いとされていた異邦人たちが救いへと導かれていく様子が対比して描かれているわけです。異邦人たちがパウロの説教を聞いて主の言葉を賛美したというのはもっともなことです。パウロの言葉は、神さまはあなたたちと共にいる方だという宣言であって、それは神さまとは無縁な存在と貶められていた彼らの尊厳が神さまの前に回復されたことを意味していたからです。

ですから、ここでは普通、ユダヤ人たちが悪者になります。自分たちが信じていたはずの神さまを見失ってしまう。自分たちの作った規則である律法に拘るあまり、目の前で語られた良い知らせに気付くことができない。愚かで頑ななユダヤ人、イエスさまを救い主として受け入れないユダヤ人、イエスさまを殺したユダヤ人、神さまから遣わされてきた人たちを迫害し、追い出し、時には殺してしまうユダヤ人。だからこの聖書は、ユダヤ人を反面教師として、異邦人の立場から読まれることが多いのです。

けれども、おかしいことにこう書いてあるのです。「ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動した」。そうしてパウロたちを迫害して追放させた。不思議なことに「神をあがめる」貴婦人たちや町のおもだった人、と「神をあがめる」とわざわざ書いているのです。いや、彼らは、本当には神さまをあがめていない、分かっちゃいないんだとは書いてないということです。

この聖書を読むとき、私たちが立つべき場所というのは実はユダヤ人側なんじゃないかと思うのです。これはキリストを信じ、教会に属している人たちに向けられたメッセージですから、教会に通う「神さまをあがめる」人たちに対する忠告であり、神さまの願いの本質を伝えようとしているものなのではないか、と思えるのです。

囚われた思いから

人は、何かの思いに囚われているとき、しばしば、不幸になります。人間は、いつも何かにこだわって生きるものです。良いことをしなければいけない、まじめでなければいけない、良い人間でなければいけない、それらは、悪いことではありません。けれども、その間違いのない不変なものが私たちの中で囚われとなったとき、私たちに過ちを犯させることがあるのです。

私たち人間が、憎しみに囚われたり、正しさを理由に他人を傷つけてしまうときは、そんなときです。信仰でも同じです。これが正しいという思い込みは、時に人を裁き、人を拒絶し、人を迫害し追い出す力ともなるのです。

考えてみればイエスさまの十字架の死は、このような人の宗教的な拘りが生み出した悲劇でした。ナザレ出身の大工がメシアであるはずがない。イエスというのは、メシアだと自らを呼んで、神を冒瀆する大罪人だと、人々は正しいと信じることのために、イエスさまを殺したのです。

けれどパウロは、この人々の過ちの先に復活があったと語ったのでした。パウロ自身もかつて、イエスさまを信じる人々を迫害していたわけです。でも、そんな囚われから自由になった、目からうろこが落ちる体験を通して、解放されたのです。だからこそ、イエスさまを拒否したあなたたちも、自分が正しいと思い込んでいるこだわりから自由になって、心開いて自由になりましょう。イエスさまの福音を受け入れましょう、と呼びかけているわけです。そうすれば、神さまの愛が注がれ続けてきたことに気が付くことができるでしょう。おびえながら、恐れながら救いを待ち続ける民ではなくて、喜びをもって生き生きと歩んでいく、救われた神さまの民となれるでしょう。

人が幸せに生きる秘訣は自分の心に適う拘り、それを捨てることです。けれど、そんなことを本当にはできないのです。どこかで好き嫌いを持ち、どこかに良い悪いの判断をもつのが私たちです。でも、そんな人の外的な囚われと、神さまの願いとの間に、イエスさまはこの世に来られたのでした。自分を傷つけた人、自分を追い出した人、自分を殺した人の下に十字架で殺されたイエスさまは戻ってきた。それもすごく優しい顔をして、赦すと言って戻ってきた。その願いの前に私たちは立っているのだ、とパウロは言うのです。

自分の中に信じている教えのために生きようとするのではなくて、イエスさまの前に立って赦された一人として生きようとする。それは言い換えると、私たちの思いの外側、私たちが当たり前だと思っているものの外側にある、多様で豊かな世界の真実に、目と心を開いて生きようとする生き方です。

いつもイエスさまを見上げて

人が人生に、こんなはずじゃない、と思ったり、こんなことは許せないと思うのは、自分を愛しているからです。自分の考え方に間違いはないと、その思いを放そうとしないからです。イエスさまを信じることは、今まで知らなかった新しい何かの教えを守ることじゃない。何を理由にしても、自分自身や他の人に○や×を付けようとする私たちの心に気が付いて、そこから自由になることです。

それは人には難しいのです。腹は立つし、他人の悪いところばかりが目につくし、自分のことすら気に入らなかつたりするのです。まして、分け隔てなく誰をも等しく愛するなんてとてもできないのです。だから福音は守るべき教えじゃないのです。いつもイエスさまの生き様へと目を向ける。自分の生き方を見て、イエスさまを見上げるのです。自分が信じ、想い、こだわっている囚われから、少し離れて外側を見るのです。

すると悲しみが悲しみだけではないことに、苦しみが苦しみだけではないことに、怒りが怒りだけではないことに気付く。そして少し自由になることができる。少し自分や他人を赦すことができるようになるのです。

いつも、イエスさまを見上げるのです。囚われなく人を愛されたイエスさまを見ることによって、私たちもまた愛されていることに気付けるのです。それはかつてパウロによって語られた福音、喜びのメッセージであって、今、生きている私たちに、忘れることのないように語り掛けられている神さまの願いなのです。

2019年1月16日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録